

プロサッカー選手のキャリア形成に大学進学が与える影響

A Study about the influence of College-bounding to Professional Football Player's Career Shaping

1K05B044

指導教員

主査 間野義之先生

大山 香織

副査 横山文人先生

1、背景

1993 年に開幕した J リーグは、野球に続くプロスポーツの全国リーグとして、人気、代表選手の活躍ともに、その地位を確立している。現在、J リーグでは毎年約 130 名が新たにプロサッカー選手としての競技生活をスタートさせている。しかし、その一方でそれとほぼ同数の選手が引退しているという事実が存在する。しかもその 7 割はまだ 20 代の若い選手たちである。

J リーグでも、選手が抱えている引退後の生活への不安を解消し、プレーに専念できる環境を整備するため、キャリアサポートセンターを設置している。しかしながらそのコンテンツは再就職先の斡旋やインターン斡旋など、希望者が利用できるシステムになっており、選手全員にサービスを提供できているとは言いがたい。また、J リーグの新人研修は、その契約年数によって区別されたマナー研修があるだけの状態で、高校を卒業してすぐにプロサッカー選手になり、わずか数年で引退を余儀なくされる選手にとって十分なキャリア観の育成はできていないのではないだろうか。

CSC 職員によれば、最近のアスリートのキャリアのトレンドとして「キャリアにはファーストもセカンドもなくすべて一本の線でつながっている。」と述べており、キャリアは現役中のパフォーマンスを抜きにしては語れないと言える。また、キャリアは時系列を追って検証するものなので、単に、引退後のキャリアの検証だけでは有効な結論が導き出せない可能性がある。

2、研究目的

本研究では、プロサッカー選手のキャリア形成において大学進学が及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

また、それをもとに、リーグとしてどのように若い選手のキャリア観を育成するべきかを示していくことを目的とする。

3、研究方法

3-1 データ分析

〈調査方法〉J リーグ YEARBOOK 2008 ? 日刊スポーツ J リーグ選手名鑑 2008 から集計した情報をまとめた。

〈調査対象〉2008 年 11 月現在 J リーグディビジョン 1 のチームに在籍するプロサッカー選手

3-2 インタビュー調査

〈調査方法〉直接面接法によるインタビュー調査

〈調査対象〉J リーグに所属する選手 1 名 ? OB 選手 1 名

3-3 メールによるヒアリング調査

〈調査方法〉メールによる記述式調査

〈調査対象〉? 高校卒業後 J リーグに加入した選手 3 名 ? J クラブのユースから J リーグに加入した選手 1 名

4、結果と考察

データ分析によると、年齢別に見ると、大卒選手・ユース出身選手は年齢が高くなるほど人数は減少しているが、高卒選手は年齢が高い選手は

どその数が増えている。本来年齢が増えれば選手数は減少していく。これは近年、大学進学・ユースなどプロへの選択肢が増え、高卒でプロ選手になる人数が減少したためと考えられる。

新入団選手を除いた 2 年目以上の選手で出場試合数が 0 試合の選手は高卒選手で 21 人、ユース出身選手で 25 人に対し大卒選手は 14 人で、大卒選手は即戦力として扱われている傾向が見られる。

また、平均引退年齢である 26 歳を基準として、それ以上、それ以下の選手数の割合を最終学歴別に見ると高卒・大卒選手はその割合がほぼ半々であるにも関わらず、ユース出身選手の 75.8%は 25 歳以下である。これは、最終学歴と年齢のグラフでもあるようにユース組織が 10 年以上前には整備されていなかったことが影響していると考えられる。

さらに、高卒選手と大卒選手。両者の間のキャリアの違いは、数値にこそ明確に表れないものの、インタビュー調査の結果、ほとんどの選手がその

意識の差を感じていると推測される。

J リーグが開幕し、16 年目のシーズンでは「開幕後に活躍し、引退した」という先輩の事例が少なく、選手自身はセカンドキャリアに関して不安を抱いている。その中で、多くの選手が大学進学という選択を周囲の環境や社会の縮図を知る機会として有効であると考えていた。

5、まとめ

プロサッカー選手は、引退という区切りはあるものの、プロとして、あるいはプロという選択をする前にどのように考え、どのように過ごしているかにより、選手のキャリア意識へ大きな差となって現れているようだ。

また、選手としてのキャリアを考える上でも今後は、選手としてどう見られているか、どう振舞うべきかを意識できる風土や雰囲気作りが必要であり、その意識がセカンドキャリア選択にも影響を与えるだろう。